

清心庵

泉鏡花作

一

米と鹽とは尼君が市に出で行きたまふとて、庵に
残したまひたれば、摩耶も予も餓うることなかるべ
し。固より山中の弧家なり。甘きものも酢きものも
摩耶は欲しからずといふ、予もまた同じきなり。
柄長く椎の葉ばかりなる、小き鎌を腰にしつ。籠
をば絲つけて肩に懸け、袷短に草履穿きたり。かく
てわれ庵を出でしは、午の時過ぐる此なりき。

麓に遠き市人は東雲よりするもあり。まだ夜明け
ざるに來るあり。芝茸、松茸、しめぢ、松露など、
小笹の蔭、芝の中、雑木の奥、谷間に、いと多き山
なれど、狩る人の數もまた多し。

昨日一昨日雨降りて、山の地濕りたれば、茸の獲
物然こそとて、朝霧の晴れもあへぬに、人影山に入
亂れつ。いまはハヤ朽葉の下をもあさりたらむ。五
七人、三五人、出盛りたるが斷續して、群れては坂

を歸りゆくに、いかにわれ山の庵に馴れて、あたりの地味にくはしとて、何ほどのものか獲らるべき。

米と鹽とは貯へたり。筧の水はいと清ければ、たとひ木の實一個獲ずもあれ、摩耶も予も餓うることなかるべく、甘きものも酢きものも渠はたへて欲しからずといふ。

されば予が茸狩らむとて來りしも、毒なき味の甘きを獲て、煮て食はむとするにはあらず。姿のおもしろき、色のうつくしきを取りて歸りて、見せて樂ませむと思ひしのみ。

「爺や、この茸は毒なんか。」

「え、お前様、其奴あ、うつかりしようもんならやられますぜ。紅茸といつてね、見ると綺麗でさ。

それ、表は紅を流したやうで、裏はハア眞白で、茸の中ぢやあ一番うつくしいんだけど、食べられましねえ。あぶれた手合が欲しさうに見ちやあ指をくはへる奴でね、そいつばかりや鹽を浴びせたとつて埒明きませぬぢや、おツぱり出してしまはつせえよ。はい、」

といひかけて、行かむとしたる、山番の爺はわれ
らが庵を五六町隔てたる山寺の下に、小屋かけて唯
ひとり住みたるなり。

風吹けば倒れ、雨露に朽ちて、卒堵婆は絶えてあ
らざれど、傾きたるまゝ苔蒸すまゝに、共有地の墓
いまなは残りて、松の蔭の處々に數多く、春夏冬は
人もこそ訪はね、孟蘭盆にはさすがに詣で來る縁者
もあるを、いやが上に荒れ果てさして、靈地の跡を
空しうせじとて、心ある市の者より、田畑少し附屬
して養ひ置く、山番の爺は顔丸く、色煤ひて、眼は
窪み、鼻圓く、眉は白くなりて針金の如きが五六本
短く生ひたり。繼はぎの股引膝までして、毛脛細く
瘠せたれども、健かに。谷を攀ぢ、峰にのぼり、森
の中をくゞりなどして、杖をもつかで見めぐるにぞ、
盗人の來て林に潜むことなく、わが庵も安らかに、
摩耶も頼母しく思ふにこそ、われも懐しと思ひた
り。

「食べやしないんだよ。爺や、唯玩弄にするんだ
から。」

「それならば可うござが。」

爺は手桶を提げ居たり。

「何でもかう其水中へうつして見るとの、はつきりと影の映る奴は食べられますで、茸の影がぼんやりするのは毒がありますぢや。覚えて置かつしやい。」

「一杯呑ましておくれな。咽喉が渴いて、しやうがないんだから。」

「さあ／＼、いまお寺から汲んで来たお初穂だ、あがんなさい。」

掬ばむとして猶豫らひぬ。

「柄杓がないな、爺や、お前ン處まで一所に行かう。」

「何が、佛様へお茶を煮てあげるんだけんど、お前様のきれいなお手だ、ようござす、つソニンで呑まつしやいさ。」

俯向きざま掌に掬ひてのみぬ。清涼掬すべし、此水の味はわれ心得たり。遊山の折彼の山寺の井戸の水試みたるに、わが家のそれと異らずよく似たり。

實げによき水みづぞ、市中まちなかにはまた類たぐひあらしと亡なき母ははのたまひき。いまこれをはじめならず、われもまたしば／＼くらべ見みつ。摩耶まやと二人ふたりいま住すまへる尼君あまぎみの庵いほりなる筧かけひの水みづも其味そのあぢはひこれと異ことなるなし。惡熱あくねつのあらむ時とき三ツみの水みづのいづれをか掬むすばんに、わが心地こゝちいかならむ。忘わするゝばかりのみはてたり。

「うんや遠慮えんりよさつしやるな、水みづだ。ほい、強しひるにも當あたらぬかの。おゝ、それからいまのさき、私わしが田圃たんぼから歸かへりがけに、うつくしい女衆をんなじうが、二人ふたりづれ、丁稚でつちが一人ひとり、若わかい衆しうが三人さんにんで、駕籠かごを昇かいてぞろ／＼とやつて來きをつた。や、其それが空駕籠からかごぢやつたわ。もし／＼、清心せいしん様さまとおつしやる尼様あまさまのお寺てらはどちらへ、と問とひくさる。はあ、それならと手てを取とるやうに教をしへてやつけが、お前まへ様用さまもちでもないかの。いゝ加かけ減へんに遊あそばつしやつたら、迷兒まひこにならずに歸かへらつしやいよ、奥様おくさまが待まつてござらうに。」

と語かたりもあへず歩あゆみ去さりぬ。摩耶まやが身みに事ことなきか。

まひ茸は其形細き珊瑚の枝に似たり。軸白くして薄紅の色さしたると、樺色なると、また黄なると、三ツ五ツはあらむ、芝茸はわれ取つて捨てぬ。最も數多く獲たるは紅茸なり。

こは山蔭の土の色鼠に、朽葉黒かりし小暗きなかに、まはり一抱もありたらむ榎の株を取巻きて濡色の紅したゝるばかり塵も留めず地に敷きて生ひたるなりき。一ツづゝ其なかばを取りしに思ひがけず眞黒なる蛇の小さきが紫の蜘蛛追ひ駈けて、縦横に走りたれば、見るからに毒々しく、あまれるは殘して留みぬ。

松の根に踞ひて、籠のなかさしのぞく。この茸の數も、誰がためにか獲たる、あはれ摩耶は市に歸るべし。

山番の爺がいひたる如く駕籠は来て、われよりさきに庵の柴折戸にひたと立てられたり。壮佼居て一人は棒に頤つき、他は下に居て煙草のみつ。内にはうらわかきと、冴えたると、しめやかなる女の聲し

て、摩耶のものいふは聞えざりしが、いかでわれ入
らるべき。人に顔見するがもの憂ければこそ、摩耶
も予もこの庵には籠りたれ。面合すに憚りたれば、
ソと物の蔭になりつ。故らに隔りたれば竊み聴かむ
よしもあらざれど、渠等空駕籠は持て來たり、大方
は家よりして迎に來りしものならむを、手を空しう
して歸るべしや。

一同が庵を去らむ時、摩耶もまた去らでやある、
もの食はでもわれは餓えまじきを、かゝるもの何か
せむ。

打こぼし投げ拂ひし籠の底に残りたる、唯一ツあ
りし松茸の、手の觸れしあとの錆つきて斑らに緑晶
の色染みしさへあぢきなく、手に取りて見つゝわれ
俯向きぬ。

顔の色も沈みけむ、日も八ヤたそがれたり。濃か
りし蒼空も淡くなりぬ。山の端に白き雲起りて、練
衣の如き艶かなる月の影さし初めしが、刷いたるや
う廣がりて、墨の色せる巔と連りたり。山はいまだ
暮ならず、夕日の餘波あるあたり、薄紫の雲も見ゆ。

そよとばかり風立つまゝに、むら薄の穂打靡きて、
肩のあたりに秋ぞ染むなる。さきには汗出で、咽喉
渴くに、爺にもとめて山の井戸の水飲みたりし、其
冷かさおもひ出でつ。さる時の我といまの我と、月
を隔つる思ひあり。青き袷に黒き帯して瘡せたるわ
が姿つく／＼とニしながら寂しき山に腰掛けたる、
何人もかゝる状は、やがて皆孤兒になるべき兆なり。

小笹ざわ／＼と音したれば、ふと頭を擡げて見ぬ。
やゝ光の増し來れる半輪の月を背に、黒き姿して
薪をば小脇にかゝへ、崖よりぬつくと出で、薄原
に顯れしは、まためぐりあひたるよ、彼の山番の爺
なりき。

「まだ歸らつしやらねえの。おゝ、薄ら寒くなり
をつた。」

と呟くが如くにいひて、かゝる時、かゝる出會の
度々なれば、故とには近寄らで離れたるまゝに横ぎ
りて爺は去りたり。

「千ちゃん。」

「え。」

予は驚きて顧りぬ。振返れば女居たり。

「こんな處に一人で居るの。」

といひかけてまづ微笑みぬ。年紀は三十に近かるべし、色白く妍き女の、眼の働き活して風采の俠なるが、帯じめきりと裳を深く、凜々しけなる扮装しつ。中ざしキラ／＼とさし込みつゝ圓鬚の艶かなる、舊わが居たる町に住みて、亡き母上とも往來しき。年紀少くて孀になりしが、摩耶の家に奉公するよし、予も豫て見知りたり。

眼を見合せてさしむかひつ。予は何事もなく頷きぬ。

女はぢつと予を瞻りしが、急にまた打笑へり。

「何うもこれぢやあ密通をしようといふ顔ぢやあないね。」

「何をいふんだ。」

「何をもないもんですよ。千ちゃん！ お前様

は。

「

いひかけて渠はやゝ眞顔になりぬ。

「一體お前様まあ、何うしたといふんですね、驚いたぢやアありませんか。」

「何をいふんさ。」

「あれ、また何をぢやアありませんよ。盗人を捕へて見ればわが兒なりか、内の御新造様のいゝ人は、お目に懸るとお前様だもの。驚くぢやアありませんか。え、千ちゃん、まあ何でも可いから、お前様ひとつ何とかいつて、内の御新造様を返して下さい。裏店の媽々が飛出したつて、お附合 五六軒は、おや、とばかりで騒ぐわねえ。千ちゃん、何だつてお前様、殿様のお城か、内のお邸かといふ家の若御新造が、此間の御遊山から、直ぐに何處へ行らつしやつたかお歸りが無い、お行方が知れないといふのぢやアありませんか。」

ぱつとしたら國中の騒動になりますわ。お出入が八方へ飛出すばかりでも、二千や三千の提灯は駆けまはらうといふもんです。まあ察しても御覽なさい。これが下々のものならばさ、片膚脱の出刃庖丁の向う願巻か何かで、阿魔！ とばかりで飛出す譯ぢやあゝるんだけれど、何しろねえ、御身分が御身分だから、實は大きな聲を出すことも出来ないで、旦

那様は、蒼くなつて在らつしやるんだわ。

今朝のこつたね、不斷一八に茶の湯のお合手に入らつしやつた、山のお前様、尼様の、清心様がね、あの方はね、平時はお前様、八十にもなつて居てさ、山から下駄穿でしやん／＼と下りて入らつしやるのに、不思議と草鞋穿で、饅頭笠か何かで遣つて見えてさ、まあ、斯うだわ。

（御宅の御新造様は、私ん處に居ますで案じさつしやるな、したがな、また舊なりにお前の處へは來ないからさう思はつしやいよ。）

と好きなことをいつて、草鞋も脱がないで、さつ／＼去つておしまひなすつたでせう。

さあ騒ぐまいか。彼方此方聞きあはせると、アノ尼様はこの四五日前から方の歸依者ン家をずつと廻つて、一々、

（私は些少思ひ立つことがあつて行脚に出ます。

しばらく逢はぬでお暇乞ぢや。そして言つて置くが、皆の衆決して私が留守へ行つて、戸をあけることはなりませんぞ。）

と、さういつておあるきなすつたさうさ、ね、そして肝心のお邸を、一番あとまはしだらうぢやあな

いかえ、これも酷^{ひど}いわね。
「

「うつちやつちやあ置かれな、いえ、置かれな
 い處ぢやあない。直ぐお迎ひをといふので、お前様、
 旦那に伺ふとまあ何うだらう。」

御遊山を遊ばした時のお伴のなかに、内々清心庵
 に在らつしやることを突留めて、知つたものがあつ
 て、先にもう旦那様に申しあげて、あら立てゝはお
 家の瑕疵といふので、そつとこれまでにお使が何遍
 も立つたといふぢやアありませんか。

御新造様は何といつても平氣でお歸り遊ばさない
 といふんだもの。えゝ！ 飛んでもない。何とおつ
 しやつたつて引張つてお連れ申しませうとさ、私と
 お仲さんといふのが二人で、男衆を連れてお駕籠を
 持つてさ、えツちらおツちらお山へ來たといふもん
 です。

尋ねあてゝ、尼様の家へ行つて、お頼み申します、
 とやると、お前様。

(誰方、)

とおつしやつて、あの薄暗いなかにさ、胸の處か

ら少し上をお出し遊ばして、眞白な細いお手の指が
五本衝立の縁へかゝつたのが、はつきり見えたわ、
御新造様だあね。

お髪がちいつと亂れてさ、藤色の袷で、ありやし
かも千ちゃん、此間お出かけになる時に私が後から
お懸け申したお召だらうぢやアありませんか。凄か
つたわ。おやといつて皆後じさりをしましたよ。

驚きましたね、そりや舊のことをいへば、何だけ
れど、第一お前様、うちの御新造様とおつしやる方
がさ、頼みます、誰方といふことを、此五六年ぢや
あ、もう忘れておしまひ遊ばしたゞらうと思つたも
の。

誰だぢやあございません。さて、あなたはといふ
ことになるよ、

(また、迎かい。)

といつて、笑つて在らつしやるといふもんです。

いえまたも何も、滅相な。

(皆御苦勞よ。だけれど私あまだ歸らないから、
かまはないでくれ。些少やすんだらお歸りだと
いゝ。お湯でもあげるんだけれど、それよりか庭の

ね、箕の水が大層々々、おいしいよ。）

なんて澄して在らつしやるんだもの。何だか私たちあ餘りな御様子に呆れツちまつて、茫乎したね。

こりやまあ魅まれてゞも居ないか不知と思つた位だわ。

いきなり後からお背を推して、お手を引張つてといふわけにもゆかないのでね、まあ、御挨拶半分にお邸はアノ通り、御身分は申すまでもございません。お實家には親御様お兩方ともお達者なり、姑御と申すはなし、小姑一人ございますか。旦那様は御存じでもございませう。さうかといつて御氣分がお悪いでもなく、何が御不足で、尼になんぞならうと思し召すのでございませうと、お仲さんと二人兩方から寄りますとね。御新造様が、

（いゝえ、私は尼になんぞなりはしないから。）

（へえ、それではまた何う遊ばしてこんな處に、）

（ちつと用があつて、）

とおつしやるから、何ういふご用でツて、まあ聞きました。

（そんなこといはれるのがうるさいから此處に居るんだもの。可いから、お歸り。）

とこんな御様子なの。だつて、それぢやあ困るわね。歸るも歸らないもありやあしないわ。

ぢやあまあ其は斷つてお聞き申しませんまでも、一體此家にはお一人でございますかかつて聞くと、

(二人。)とかうおつしやつた。

さあ、黙つちやあ居られやしない。

かう／＼いふわけですから、尼様と御一所ではなからうし、誰方とお二人でといふとね、

(可愛い兒とさ、)とお笑ひなすつた。

うむ、こりや仔細のないこつた。華族様の御臺様を世話でお暮し遊ばすといふ御身分で、考へて見りやお名もまや様で、夫人といふのが奥様のことだといつて見れば、何のことはない、大倭文庫の、御臺様さね。つまり苦勞のない摩耶夫人様だから、大方洒落に、ちよいと雪山のといふ處をやつて、御覽遊ばすのであらう。凝つたお道樂だ。

とまあ思つちやあ見たものゝ、千ちゃん、常々の御氣象が、そんなぢやあおあんなさらない

でせう。

可愛い兒とおつしやるから、何ぞ尼寺でお氣に入つたかなりやでもお見付け遊ばしたのか不知なんと思

つてさ、うかゞつて驚いたのは、千ちゃんお前様のことぢやあないかね。

（いつでももうはさをして居たからお前たちも知つておいでだらう。蘭や、お前が御存じの。）

とおつしやつたのが、何と十八になる男だもの、お仲さんが吃驚しようぢやあないか。千ちゃん、私も久しく逢はないで、きのふけふのお前様は知らないから——千ちゃん、——むゝ、お妙さんの兒の千ちゃん、なるほど可愛い兒だと實をいへば、はじめは私もそれならばと思つたがね、考へて見ると、お前様、いつまで、九ツや十で居るものか。もう十八だとさう思つて驚いたよ。

何の事はない、密通だね。

いくら思案をしたつて御新造様は人の女房さ。そりやいくら邸の御新造様だつて、何だつて矢張女房だもの。女房がさ、千ちゃん、たとひ千ちゃんだつて何だつて、男と二人で隠れて居りや、何のことはない、怒つちやあいけませんよ、矢張何さ。

途方もない、亂暴な小僧ツ兒の癖に、失禮な、未恐しい、見下げ果てた、何の生意氣なことをいつたつて私が家に今でもある、アノ藤で編んだ茶臺は何

うだい、嬰が這つてあるいて玩弄にして、チユツ
ノ、嚙んで吸つた齒形がついて残ツてら。叱り倒し
てと、まあ、怒つちやあ嫌よ。「

四

「それが何も、御新造様さへ素直に歸るといつて下さりや、何でもないことだけれど、何うしても歸らないとおつしやるんだもの。」

お歸り遊ばさないたつて、其で濟むわけのものぢやあございませぬ。一體何う遊ばす思召でございませぬ。

（あの兒と一所に暮さうと思つて、）

とばかりぢやあ、困ります。どんなになさいました處で、千ちゃんとお御一所においで遊ばすわけにはまゐりませぬ。

（だから、此家に居るんぢやあないか。）

其此家は山の中の尼寺ぢやあゝりませぬか。こんな處にあの兒と二人おいで遊ばしては、世間で何と申しませう。

（何といはれたつて可いんだから、）

それでは、あなた、旦那様に濟みますまい。第一親御様なり、また、

（いゝえ、それだからもう一生人づきあひをしないつもりで居る。私に分つてるから、可いから、お

前たちは歸つておしまひ、可いから、分つて居るのだから、)

とそんな分らないことがありますか。ね、千ちやん、いくら私たちが家來だからたつて、ものゝ理は理さ、あんまりな御無理だから種々言ふと、しまひにやあ只、

(だつて不可いから、不可いから、)

とばかりおつしやつて果しがないの。もうかうなりや何うしたつてかまやしない。何んなことをしてなりと、お詫はあとですることゝ、無理やりにも力づくで、此方は五人、何の、あんな御新造様、腕づくなら此蘭一人で澤山だわ。さあといふと、屹と遊ばして、

(何をおしだ、お前達、私を何だと思ふのだい、)とおつしやるから、はあ、そりやお邸の御新造様だと、さう申し上げると、

(女中たちが、そんな亂暴なことをして濟みますか。良人なら知らぬこと、両親にだつて、指一本さゝしはしない。)

あれで威勢がおあんなさるから、何うして、屹と、おからだがすわると、すくんじまわあね。でもさ、

そんな分らないことをおつしやれば、もう御新造様でも何でもない。

(他人ならばうつちやつて置いておくれ。)

と斯うでせう。何てつたつて、とてもいふことをお肯き遊ばさないお氣なんだから仕やうがない。がそれで世の中が濟むのぢやあないんだもの。

ぢやあ、旦那様がお迎にお出で遊ばしたら、

(それでも歸らないよ。)

無理にも連れようと遊ばしたら、

(さうすりや御身分にかゝはるばかりだもの。)

もう何う遊ばしたといふのだらう。それぢやあ、

旦那様と千ちゃんと、どちらが大事でございますつて、此上のいひやうがないから聞いたの。さうするとお前様、

(えゝ、旦那様は私が居なくつても可いけれど、千ちゃんは一所に居てあげないと死んでおしまひだから可哀相だもの。)

とこれぢやあもう何にもいふことはありませんわ。こゝなの、こゝなんだがね、千ちゃん、一體こりやま、お前さん何うしたといふのだね。」

女をんなはいひかけてまた予よが顔かほを瞻みまもりぬ。予よはほと一ひと呼吸いきついたり。

「摩ま耶やさんが知しつておいでだよ、私わたしは何なんにも分わからないんだ。」

「え、分わからない。お前まへさん、まあ、だつて御ご自じ分ぶんのことが御ご自じ分ぶんに。」

予よは何なんとかいふべき。

「お前まへ、それが分わかる位くらゐなら、何なにもこんなにやなりやしない。」

「あゝれ、また此こ處ゝでもかうだもの。」

五

をんな
女は又あらためて、

「一體詮じ詰めた處が千ちゃん、御新造様と一所
に居て何うしようといふのだね。」

「さることはわれも知らず。」

「別に何うつてことはないんだ。」

「まあ。」

「別に、」

「まあさ、御飯をたいて。」

「詰らないことを。」

「まあさ、御飯をたいて、食べて、それから、」

「話をしてるよ。」

「話をして、それから。」

「知らない。」

「まあ、それから。」

「寝つちまふさ。」

「串戯ぢやあないよ。そしてお前様、いつまでさ

うして居るつもりなの。」

「死ぬまで。」

「え、死ぬまで。もう大抵ぢやあないのね。まあ、

そんならさうとして、話は早い方が可いが、千ちゃん、お聞き。私だつて何も彼家へは御譜代といふわけぢやあなしさ、早い話が、お前さんの母様とも私あ知合だつたし、そりや内の旦那より、お前さんの方が私やまつたくの所、可愛いわ。可いかな。

處でいくらお前さんが可愛い顔をしてるたつて、情婦を拵へたつて、何も此年紀をしてもものゝ道理がさ、私がやつかむにも當らずか、打明けた所、お前さん、御新造様と出来たのかね。え、千ちゃん、出来たのなら其つもりさ。お楽しみ！ てなことで引退らうぢやあないか。不思議で堪らないから聞くんだが、何うだねえ、出来たわけかね。」

「何がさ。」

「何がぢやあないよ、お前さん出来たのなら出来たで可いぢやあないか、いつておしまひよ。」

「だつて、出来たつて分らないもの。」

「むゝ、何うもこれぢやあ拵へようといふ柄ぢやあないのね。いえね、何も忠義だてをするんぢやないが、御新造様があんまりだからツイ私だつてむつとしたわね。行がかりだもの、お前さん、この様子ぢやあ皆こりやアノ兒のせゐだ。小兒の癖にいきす

ぎな、何時のまにませたらう、取つつかまへてあや
まらせてやらう。私ならぐうの音も出させやしない
と、まあ、さう思つたもんだから、些少も言分は立
たないし、跋も悪しで、あつちやあお仲さんにまか
して置いて、お前さんを探して來たんだがね。

逢つて見ると、何うして、矢張千ちやんだ、だつ
てこの様子で密通も何もあつたもんぢやあないやね。
何だか些少も分らないが、さて、内の御新造様と、
お前様とは何うしたといふのだね。」

知らず、これをもまた何とかいはむ。

「摩耶さんは、何とおいひだつたえ。」

「御新造さんは、なかよしの朋達だつて。」

かくてこそ。

「まつたく左様うなんだ。」

渠は肯ずる色あらざりき。

「だつてさ、何だつてまた、たかゞなかの可いお
朋達位で、お前様、五年ぶりで逢つたつて、六年、
ぶりで逢つたつて、顔を見ると氣が遠くなつて、氣
絶するなんて、人がありますか。千ちゃん、何だつ
て然ういふぢやありませんか。御新造様のお話し

では、このあひだ尼寺でお前さんとお逢ひなすつた時、お前さんは氣絶ツちまつたといふぢやアありませんか。それでさ、御新造様は、あの兒がそんなに思つてくれるんだもの、何うして置いて行かれるものか、なんて好きなことをおつしやつたがね、何うしたといふのだね。」

げにさることもありしよし、あとにてわれ摩耶に聞きて知りぬ。」

「だつて、何も自分ぢやあ氣がつかなくつたんだから、何ういふわけだか知りやしないよ。」

「知らないたつて、何うもをかしいぢやアありませんか。」

「摩耶さんに聞かさ。」

「御新造様に聞きや、矢張千ちゃんにお聞き、と然うおつしやるんだもの。何が何だか私たちにやあ些少も譯がわかりやしない。」

然り、さることのくはしくは、世に尼君ならで知りたまはじ。」

「お前、私達だつて、口ぢやあ分るやうにいへな

いよ。皆みな尼な様さまが御ご存ぞんじだから、聞ききたきやあの方に聞きくが可いいんだ。」

「そら／＼、其その尼あま様さんだね、その尼あま様さんが全ぜん體たい分わからないんだね。

名めい僧そうの、智ち識しきの、僧そう正じやうの、何なんのツても、今いま時ときの御ご出家しゅつげに、女をんなでこそあれ、山やまの清せい心しんさんくらゐの方はありやしない。

もう八十にもなつておいでなのに、法ほ華け經きやう二十八卷かんを立たて讀よみに遊あそばして、お茶ちや一ひとツあがらない御ご修しゆ行ぎやうだと、他た宗しゆの人ひとでも、何なんでも、ああの尼あま様さんといいやあ拜をがむのさ。

それに何どうだらう。お互たがひの情こころを通つうじあつて、戀こひの橋はし渡わたをおしちやあないか。何なんの事ことはない、こりや萬ばん事じ人の惡わるい髮かみ結ゆひの役やくだあね。おまけにお前まへ様さん、ああの薄うす暗くらい尼あま寺でらを若わかいもの同どう士しにあけ渡わたして、御ご機き嫌げんよよう、か何なんかで、ふいと何ど處こかへ遁にげた日ひになつて見みりや、破は戒かい無む慙ぜんといふのだね。亂らん暴ばうぢやあないか。千せんちやん、尼あまさんだつて七しち八はち十じゆまで行おこなひ澄すまして居あながら、お前まへさんのために、ありやまあ何どうしたといふのだらう。何なんか、千せんちやん處ところは尼あまさんのお主しゆ筋すぢでもあるのかい。さうでなきや分わからないわ。何どんな因いん

縁ねんだね。」

と心こころ籠こごめて問とふ状さまなり。尼君あまぎみのためなれば、われ
少すこしく語かたるべし。

「お前まへも知しつておいでだね、母上おつかさんは身みを投なげてお
亡なくなんなすつたのを。」

「あゝ。」

「ありやね、尼様あまさんが殺ころしたんだ。」

「何なんですと。」

女をんなは驚おどろきて目めを二みはりぬ。

「いゝえ、手を懸けたといふんぢやあない。私は未だ九歳時分のことだから、何んなだか、くはしい譯は知らないけれど、母様は、お前、何か心配なところがあつて、それで世の中が嫌におなりで、くよ／＼して在らつしやつたんだが、名高い尼様だから、話をしたら、慰めて下さるだらうつて、私の手を引いて、しかも、冬の事だね。

ちら／＼雪の降るなかを山へのぼつて、尼寺をおたづねなすつて、爐の中へ何だか書いたり、消したりなぞして、しんみり話をしておいでだつたが、やがてね、二時間ばかり経つてお歸りだつた。ちやうど晩方で、ぴゆう／＼風が吹いてたんだ。

尼様が上框まで送つて来て、分れて出ると、戸を閉めたの。少し行懸ると、内で、

（おゝ、寒、寒。）と不作法な大きな聲で、アノ尼様がいつたのが聞えると、母様が立停つて、何故だか顔の色をおかへなすつたのを、私は小兒心にも覚えて居る。それから、しを／＼として山をお下りなすつた時は、もうとつぷり暮れて、雪が、お前、

雲みぞれになつたらう。

麓ふもとの川かはの橋はしへかゝると、鼠色ねずみいろの水みづが一杯いっぱいで、ひだをうつて大蛇おほうねりに蛇うねつちやあ、どう／＼ツて聞きえてさ。眞黒まつくろな線すぢのやうになつて、横よこぶりにびしゃ／＼と頬邊ほつぺたを打うつちやあ雲みぞれが消きえるんだ。一山ひとやま々々／＼になつてる柳やなぎの枯かれたのが、渦うづを巻まいて、それで森しんとして、あかり一ツ見みえなかつたんだ。母様おつかさんが、

(尼あまになつても、矢張やつぱり寒さむいんだもの。)

と獨言ひとりごとのやうにおつしやつたが、其それつきり何處どこかへ行いらつしやつたの。私わたしは目めが眩くらんぢまつて、些ちつ少とも知らなかつた。

えゝ！ それで、もうそれつきりお顔かほが見みられずじまひ。年としも月つきもうる覺おぼえ、其癖そのくせ、嫁人よめいりをお為しの時ときはちやんと知しつてるけれど、はじめ逢あひ出だした時ときは覺おぼえちやあ居あないが、何なんでも摩耶まやさんとは其年そのとしから知合しりあつたんだとさう思おもつた。

私わたしはね、母稼おつかさんがお亡なくなんなすつたつて、夫それを承しゃ知うちア出で来きないんだ。

そりやものも分わかつたし、お亡なくなんなすつたことは知しつてるが、何どうしてもあきらめられない。

何なんの詰つまらない、學がく校かうへ行いつたつて、人ひととつきあつ

たつて、母様が生きてお歸りぢやあなし、何にするものか。

とさう思ふほど、お顔が見たくツて、堪らないから、何うしませう／＼、何うかしておくれな。何うでもして下さいなツて、摩耶さんが嫁入をして、逢へなくなつてからは、なほの事、行つちやあ尼様を強請つたんだ。私あ、だゞを捏ねたんだ。

見ても、何でも分つたやうな、すべて承知をして居るやうな、何でも出来るやうな、神通でもあるやうな、尼様だもの。何うにかしてくれないことはなからうと思つて、其かはり、自分の思つてゐることは皆打あけて、いつて、さうしちやあ眼を瞑つて尼様に暴れたんだね。

「さういふわけさ。」

他に理屈もなんにもない。此間も、尼さまン處へ行つて、例のをやつてる時に、すつと入つておいでなのが、摩耶さんだつた。

私は何とも知らなかつたけれど、氣が着いたら、尼様が、頭を撫で、

（千坊や、これで可いのぢや。米も鹽も納屋にあるから、出してたばさして貰はつしやいよ。私は一

寸町^{つとまち}まで托鉢^{たくはつ}に出懸^{でか}けます。大人^{おとな}しくして留守^{るす}をするのぢやぞ。)

とさうおつしやつた切^{きり}、お前^{まへ}、草鞋^{わらぢ}を穿^はいてお出^{でか}懸^けで、戻^{もど}つておいでのやうすもないもの。

摩耶^{まや}さんは一所^{いっしょ}に居^ゐておくれだし、私^{わたし}はまた摩耶^{まや}さんと一所^{いっしょ}に居^ゐりや、母様^{おつかさん}のこと、何^どうにか堪忍^{かんにん}が出来^いるのだから、もう何も彼^なもうつちやつちまつたんさ。

お前^{まへ}、私^{わたし}にだつて、理屈^{りくつ}は分^わりやしな。摩耶^{まや}さんも一所^{いっしょ}に居^ゐりや、何^{なん}にも食^たべたくも何^{なん}ともないとさうおいひだもの。氣^きが合^あつたんだから、なかゞいゝお朋達^{ともたち}だらうよ。」

かくいひし間^まにいる／＼のことこそ思^{おも}はれた。胸^{むね}痛^{いた}くなりたれば俯向^{うつむ}きぬ。女^{をんな}が傍^{かたはら}に在^あるも予^よはうるさくなりたり。

「だから、もう他^{ほか}に何^{なん}ともいひやうは無^ないのだから、あれがあゝだから濟^すまないの、義理^{ぎり}だの、濟^すまないぢやあないかなんて、もう聞^きいちやあいけない。ひととさ、ものをいつてるのがうるさいから、それだから、かうしてるんだから、何^どうでも可^いいから、もう歸^{かへ}つておくれな。摩耶^{まや}さんが歸^{かへ}るとおいひなら連^つ

れてお歸り。大方、お前たちがいふことは、お肯き
ぢやあるまいよ。」

予はわが襟を掻き合せぬ。さきより踞ひたる頭次
第に垂れて、芝生に片手つかんずまで、打沈みたり
し女の、此時やう／＼顔をばあげ、いま更にまた瞳
を定めて、他のこと思ひ居る、わが顔、瞻るよと覺
えしが、しめやかなるものいひしたり。

「可うござんす。千ちゃん、私たちの心とは何か
まるで變つてるやうで、お言葉は腑に落ちないけれ
ど、さつきもあんなにやあ言つたものゝ、いま此處
へ、尼様がおいで遊ばせば、矢張つむりが下るんで
す。尼様は尊く思ひますから、何でも分つたやうす
があつて、あの方の遊ばす事だ。まあ、あとで何う
ならうと、世間の人が何うであらうと、こんな處は
とても私たちの出る幕ぢやあない。尼様のお計らひ
だ、何うにか形のつくこととでござんせうと、然うま
あね、千ちゃん、さう思つて歸ります。

何だか私も茫乎したやうで、氣が變になつたやう
で、分らないけれど、何うもかうした御様子ぢやあ、

千ちゃん、お前様と、御新造様と一ツお床でおよつたからつて、別に仔細はないやうに、ま私は思ひます。見りやお前様もお浮きでなし、あつちの事が氣にかゝりますから、それぢやあお分れといたしませう。あのね、用があつたら、そつと私とこまでおつしやいよ。」

とばかりに渠は立ちあがりぬ。予が見送ると目を見合せ、

「小憎らしいねえ。」

と小戻りして、顔を斜にすかしけるが、

「どれ、あの位な御新造様を迷はしたは、どんな顔だ、よく見よう。」

といひかけて莞爾としつ。つと行く、むかひに登音して、一行四人の人影見ゆ。すかせば空駕籠釣らせたり。渠等は空しく歸るにこそ。摩耶われを見棄てざりしと、いそ／＼と立つたりし、肩に手をかけ、下に居らせて、女は前に立塞がりぬ。やがて近づく渠等の眼より、うたてきわれをば庇ひしなりけり。

熊笹のびて、薄の穂、影さすばかり生ひたれば、こゝに人ありと知らざる状にて、道を折れ、坂にかゝ

り、松の葉のこぼるゝあたり、眼の下近く通りゆく。
女は其後を追ひたりしを、忍びやかに見たりける。
駕籠のなかにものこそありけれ。設の蒲團敷重ねし
に、摩耶はあらで、其藤色の小袖のみ薫床しく乗せ
られたり。記念にとて送りけむ。家土産にしたるな
るべし。其小袖の上に菊の枝置き添へつ。黒き人影
あとさきに、駕籠ゆら／＼と釣持ちたる、可惜其露
をこぼさずや、大輪の菊の雪なすに、月の光照り添
ひて、山路に白くちら／＼と、見る目遙に下り行き
ぬ。

見送り果てず引返して、駈け戻りて枝折戸入りた
る、庵のなかは暗かりき。

「唯今！」

と勢よく框に踏懸け呼びたるに、答はなく、衣の
氣勢して、白き手をつき、肩のあたり、衣紋のあた
り、乳のあたり、衝立の蔭に、つと立ちて、烏羽玉
の髪の毛のひまに、微笑みむかへし摩耶が顔。篁の音し
て、叢に、蟲鳴く一ツ聞えしが、われは思はず身の
毛よだちぬ。

この蟲の聲、篁の音、框に片足かけたるトタン、

衝立ついたての蔭かげに人見ひとみえたる、われは嘗かつてかゝる時とき、かゝ
ることに出會いであひぬ。母上はくうへか、摩耶まやなりしか、われ覺おぼ
えて居をらず、夢ゆめなりしか、知しらず、前まへの世よのことな
りけむ。

【完】